「満州国」留学生予備校第3期卒業生をめぐって

周　一川・賈　曦

［要旨］

日本留学は「満州国」の国策であり，1937年夏に創立された留学生予備校は，留学の予備教育機関で希望者を教育し，日本に送り出す役割を担った。「満州国」から派遣された留学生には留学生予備校の卒業生がかなり多かった。

十数年しか存在しなかったその留学の歴史的位置付けをはっきりさせるには，「満州国」政権の留学政策，目的，日本留学のための措置だけでなく，留学生たちが留学した背景，その目的，実態，帰国後のキャリアなどを明らかにしなければならない。本稿では，文献と追跡調査に基づいて，資料が比較的多い留学生予備校第3期卒業生の概況をまとめた上で，彼らの帰国後のキャリアなどを通じて，留学生と中国社会との関連についても論述する。

はじめに

「満州国」にとって日本留学は国策であり，1937年夏に新京（現長春）で設立した留学生予備校は，留学の予備教育機関で希望者を教育し，日本に送り出す役割を担った。「満州国」から派遣された留学生には留学生予備校の卒業生がかなり多かった。

「満州国」における日本留学に関する研究には，「対支文化事業」の視点から「満州国」日本留学を分析した阿部洋『「対支文化事業」の研究』(1)，劉振生「［満州国］日本留学生の派遣」(2)などがある。また，「満州国」留学生予備校に関しては当時校長であった広田常次郎による「留学生予備校と留学生」(3)があり，1942年までの予備校学生について紹介されている。劉振生は「［満州国］日本留学生の派遣」のなかで留学生のインタビュー記録などに基づき，予備校第8期生までの概況をまとめている。

周一川は，中国人女性の日本留学史研究(4)の一環として「満州国」の日本留学を取り上げ，1999年に「［満州国］の留学政策と留日学生――概況と事例研究――」(5)を発表した。2008年からは「「満州国」における女性の日本留学」について本格的な調査研究を始め，その成果の一部として「［満洲国］における女性の日本留学――概況分析――」と「奈良女子高等師範学校における［満州国］留学生」(6)がある。

以上のように，「満州国」における日本留学に関する先行研究は少なくないが，留学生全般を扱うものが多く，その実態に迫った研究はまだまだ少ない。十数年しか存在しなかった「満州国」にとって，「日本留学」とは何であったのか。その歴史的位置付けをよりはっきりさせるには，「満州国」政権の留学政策，目的，日本留学のための措置だけでなく，留学生たちが留学した背景，その目的，実態，帰国後のキャリアなどを明らかにする必要がある。本稿では，文献と追跡調査に基づいて，資料が比較的多い留学生予備校第3期卒業生に焦点を当て，その概況をまとめた上で，彼らの帰国後のキャリアなどを通じて中国社会との関連についても検討したい。

なお，本稿は，一については主に賈が，それ以外は周が中心となって執筆した。

一．留学生予備校の第 3 期卒業生名簿

1．留学生予備校各期生の人数について

1937 年 6 月に設立された留学生予備校は，1945 年まで毎年学生を募集し，第 8 期まで卒業生を送り出した。第 9 期生は「満州国」が消滅したため，卒業できなかった。

第 5 期までの卒業生と第 6 期の在学生の人数については，留学生予備校校長広田常次郎の「留学生予備校と留学生」によると以下の通りである。第 1 期（1937 年）52 名（内女子 1 名），第 2 期（1938 年）60 名（内女子 2 名），第 3 期（1939 年）98 名（内女子 17 名），第 4 期（1940 年）142 名[7]，第 5 期（1941 年）123 名[8]（内女子 26 名），合計 475 名（内女子 71 名）であり，第 6 期（1942 年）の在学生は 188 名で，内訳は男子 150 名，女子 38 名であった[9]。

第 7 期（1943 年）と第 8 期（1944 年）の人数については，劉振生の「［満州国］日本留学生の派遣」で触れられているが，判明しているのは合格者数のみである。それによると，第 7 期の合格者は，理科 104 名（男子 78 名，女子 26 名），文科 51 名（男子 42 名，女子 9 名），合計 155 名であり，第 8 期の合格者は，理科 72 名（男子 58 名，女子 14 名），文科 29 名（男子 24 名，女子 5 名），合計 101 名であった[10]。

第 9 期の合格者は，1945 年 1 月 31 日の『政府公報』（第 3189 号）「康徳 12 年度国立留学生予備校入学試験合格者」によると，文科 20 名，理科 60 名であったが，性別の項目がないので，男女の比率は分からない。

留学生予備校記録，卒業アルバムなど，各期予備校生に関する詳細な資料があってもおかしくないのだが，管見の限り『留学生予備校第 3 期卒業生記念冊』（以下，記念冊）[11]しか見つかっていない。そのため，以下では第 3 期生に焦点を絞り，留学予備校生の留学の実態，その後の生活について見ていくこととする。

2．第 3 期卒業生名簿

記念冊には，二種類の名簿が掲載されている。一つは，最後のページにあり，姓名と住所が記載されているものである。もう一つは，写真付きの名簿であり，写真と名前が記されている。これら二つの名簿を照合し，第 3 期卒業生の一覧を表 1 にまとめた順番は，記念冊最後のページにある名簿に基づくものであり，専攻が判明した学生の掲載位置から，名簿は文系（男子，女子），理系（男子，女子）の順に並べられていると考えられる[12]。文系は 1 クラス，理系は 2 クラスであった[13]が，名簿からは理系の学生のクラス分けまではわからない。

表 1　留学生予備校第 3 期卒業生名簿

［文系］												
男子												
隋宗清	楊会禄	張景柏	王昉忱	孫従恕	韓行篤	張本同	于　翀	楊丕忠	趙尚質	戈啓堂	柏嘉祥	喬魁学
金紹炎	金阿綿	李徳森	李連荃	李文光	劉克治	曹正熙	陳興華	賈世文	金連縕	季藎忱	徐恒貴	馬鐘賢
隋宗茂												
女子												
金毓華	姜書美	閻樹旻	韓行懿									
［理系］												
男子												
金長盛	黄儒林	劉可棟	趙忠信	邵先鐸	劉中興	王承周	孫玉樑	温憲忠	林春尭	于潤海	張徳璋	包　宣
梅之秀	徐立操	宋英珍	徐　萍	衣家驊	張起国	孫大周	王煥庭	崔其祥	趙仲三	閻壮志	修　良	楊徳普

郝寿山	王克良	賀良輔	郭子森	王樹権	鄭文秀	韓樹忠	王和璧	佟蔭棠	陳著仁	王迺徳	謝宗輔	范柏齢	
孫培忠	王文彦	熙麟養	董志尭	周憲弘	王孝譲	武占元	于世庠	張恒鐸	楊肇文	郭徳栩	侯　凡	劉栞潤	
女子													
裘馥如	佟瑞芝	金玉琴	周鳳蘭	王紉卿	傅　毅	曾淑賢	李蔭清	牛庚辛	竇蓮馥	王友書	孫貴春	張淑蘭	
［不明］													
納古迪	色仁多尓吉												

出典：『留学生予備校第 3 期卒業生記念冊』に基づき作成。

記念冊最終ページの名簿には重複（楊徳普）や，写真付き名簿に掲載されていない者（聶龍驤）が入っていたり，写真付き名簿に掲載されている卒業生（納古迪，色仁多尓吉）の抜けが見られた。表 1 では，写真付き名簿と照合して確認した 98 名の卒業生を取り上げた。専攻の不明な 2 名については［不明］とした。劉振生の『「満州国」日本留学史研究』には，元留学生所有の資料をもとに作成した「留学生予備校第 3 期卒業生全員一覧」[14]があるが，専攻，男女などの区分がなく，一部名前に誤字が見られる。

二．第 3 期卒業生の進路

1．男子卒業生

駐日満州国大使館は 1936 年から 1943 年まで『満洲国留日学生録』（以下，『学生録』）を毎年作成した（1944 年については不明）。1940 年版の『学生録』[15]により留学生予備校第 3 期卒業生の留学先が判明したので，表 2 を作成した。表 2 は，学生数の多い順に並べたが，同じ人数の場合には，1940 年版『学生録』の順とした。

なお，季蓋忱，黄儒林，孫玉樑，張徳璋，衣家驊，楊徳普，王迺徳，王文彦，王孝譲，納古迪，色仁多尓吉という 11 名の卒業生は，『学生録』には記載されておらず，恐らく日本に留学しなかったと考えられる。

表 2 からわかるように，「満州国」留学生予備校の卒業生の多くは，来日直後は大学ではなく，大学の予科や専門部あるいは専門学校に入学し，その後，大学に進学する者が少なくなかった。

3 年後の 1943 年度の『学生録』を調べてみると，同年 10 月，表 2 の東京工業大学付属予備部の 10 人のうち，まだ予科に在籍している 3 人を除いて，7 名が本科に進学したことがわかる。第一高等学校には 8 人中 3 名がまだ在籍していたが，2 人が東京帝国大学に，2 人が京都帝国大学に進学した。上記 2 校以外の学校からは，京都帝国大学に 3 人，東京商科大学本科に 3 人，早稲田大学本科に 2 人，東京慈会医科大学本科と慶応義塾大学本科にそれぞれ 1 人ずつ進学する者がいた。大阪高等医学専門学校など学制年限が長い（本科 3 年）留学先に引き続き在籍する者も数名いた。しかし，1940 年当時に在籍していた表 2 の約半数の留学生は 1943 年の『学生録』に名前が確認できない。その一部は，専門学校を卒業後に大学へは進学せず，帰国したと考えられる。

表 2　第 3 期男子卒業生の留学先

学校名	氏名
東京工業大学付属予備部	劉可棟，邵先鐸，劉中興，林春尭，徐萍，張起国，孫大周，王煥庭，范柏齢，楊肇文
第一高等学校	李連荃，李文光，曹正熙，金連縕，王承周，于潤海，徐立操，韓樹忠
山口高等商業学校	王昉忱，韓行篤，于翀，賈世文，徐恒貴

早稲田大学専門部	楊丕忠，劉克治，趙仲三，王樹権
長崎高等商業学校	張本同，戈啓堂，趙尚質，柏嘉祥
名古屋高等工業学校	賀良輔，陳著仁，董志尭
大阪高等医学専門学校	王克良，孫培忠，楊会禄
東京商科大学商学専門部	張景柏，喬魁学
東京商科大学予科	隋宗清，李徳森
東京高等農林学校	閻壮志，郭徳栩
東京外国語学校	孫従恕，陳興華
東京高等師範学校	金紹炎，佟蔭棠
仙台高等工業学校	鄭文秀，張恒鐸
三重高等農林学校	郝寿山，于世庠
大阪商科大学高等商業部	温憲忠，馬鐘賢
慶応義塾大学予科	趙忠信
早稲田大学付属第一高等早稲田学院	熙麟養
早稲田大学付属第二高等早稲田学院	金阿綿
法政大学専門部	隋宗茂
日本大学専門部	劉栞潤
東京慈恵会医科大学予科	周憲弘
東京農業大学専門部	梅之秀
東京医学専門学校	侯凡
明治薬学専門学校	宋英珍
東京歯科医学専門学校	修良
北海道帝国大学農学部実科	武占元
岩手医学専門学校	郭子森
秋田鉱山専門学校	王和璧
横浜高等工業学校	崔其祥
金沢高等工業学校	謝宗輔
神戸高等工業学校	金長盛
九州医学専門学校	包宣

出典：駐日満州国大使館『満洲国留日学生録』1940 年版に基づき作成。

2. 女子卒業生

『学生録』及び元卒業生の回想によると，17 名の女子卒業生の内 14 名が日本へ留学し，3 名が満州の大学に進学した。

留学先の選択について，閻樹旻は次のように話している。「留学生会館に泊まっていた時期に進学先がそれぞれ決められた。入学試験もなかったので選考基準もよくわからなかったが，もしかすると，予備校の成績などを参考にしていたのかもしれない」[16]と。

奈良女子高等師範学校（以下，奈良女高師）は人気が高く（入学できると官費生となる），希望者が多かったが，4 名の枠しかなかった。奈良女高師に入学した閻樹旻と金毓華は，文系の歴史地理を専攻しており，同じクラスで学んだ。張淑蘭は理系で，李蔭清は家政科の専攻であった。閻樹旻以外の 3 人は，1944 年 9 月に卒業した[17]。

張淑蘭はその後広島文理科大学に進学したが，1945 年春の空襲で亡くなった。

閻樹旻の場合は，1943 年 11 月に，母が危篤という電報が届いたため，急いで帰国したが，家に戻ると，母親は健在であった。戦況が厳しくなってきた日本から娘を呼び戻すのに，母が嘘をついたのだという[18]。卒業せずに帰国したことについて，閻樹旻は「当時日本には食べ物などがあまりなく，体の具合がかなり悪化していたので，帰国させられてよかった」[19]と語った。

表 3 からわかるように，東京女子医学専門学校（以下，東京女医専）に進学した者が一番多い 7 名であり，全員留学生予備校の理系クラスの学生であった。その内の金玉琴，傅毅，王紉卿，孫貴春は 1944 年に卒業し，周鳳蘭は 1945 年に卒業した[20]。

日本女子高等商業学校（以下，日本女高商）に進んだのは留学生予備校の文系クラスの韓行懿と姜書美であった。他には，東京女子大学，満州医科大学専門部，「満州国」の新京医科大学薬学部と師道大学にそれぞれ 1 名であった。

表 3　17 名女子卒業生の進学先

学校名	氏名
東京女子医学専門学校	金玉琴，佟瑞芝，孫貴春，傅毅，王紉卿，竇蓮馥，周鳳蘭
奈良女子高等師範学校	金毓華，張淑蘭，李蔭清，閻樹旻
日本女子高等商業学校	韓行懿，姜書美
東京女子大学	曾淑賢
満州医科大学専門部	裘馥如
新京医科大学薬学部	王友書
師道大学	牛庚辛

出典：①駐日満州国大使館『満洲国留日学生録』1940 年度。
②2009 年 12 月 29 日，周一川による閻樹旻と謝宗輔へのインタビュー。

3. 韓行懿の卒業記念写真

周一川が第 3 期卒業生の一人と最初に出会ったのは 1994 年のことであり，それは東京女医専を卒業した王紉卿であった。

その後，2009 年には日本女高商の卒業生であった韓行懿へのインタビュー調査が実現し，貴重な写真を提供していただいた。写真 1 は韓行懿の卒業記念に，東京にいる第 3 期女子生が全員揃って写したものである。

写真 1　韓行懿の卒業記念写真
韓行懿（前列右から二番目）

三. 第 3 期卒業生の謝宗輔と閻樹旻

周一川は 2009 年 12 月 29 日に謝宗輔，閻樹旻夫妻を唐山市の自宅に訪ね，インタビューを行い，第 3 期生についての貴重な資料を頂いた。ここではそれに基づき，「満州国留学生」の例として二人の歩みをたどっていきたい。

謝宗輔は 1920 年に大連で生まれ，1939 年 1 月に留学予備校第 3 期生となり，同年 12 月に卒業した。その後，日本に留学し，金沢高等工業学校（1940 年 4 月～1942 年 8 月），京都帝国大学（1942 年 9 月～1944 年 4 月）では土木工学科で学び，帰国後の 1944 年 7 月～1945 年 3 月には北京公務総署水利局技術員となった。

閻樹旻は 1923 年に遼寧省鳳城県で生まれ，1938 年に安東女子国民高等学校を卒業してから留学生予備校に入学した。1940 年 4 月に奈良女高師に入学した。

二人の出会いは留学生予備校生時代であったが，当時はほとんど交流がなく，日本留学中に交際が始まった。交際開始時，謝宗輔は金沢高等工業学校の学生であり，閻樹旻は奈良女高師にいた。その後，謝宗輔は京都大学に合格し，二人はよく奈良と京都でデートをしていたという。

留学費用については，閻樹旻は官費生で毎月 40 円を給付されていたが，謝宗輔は金沢高等工業学校の時は私費で，京都大学に合格後，官費生になった。その後，謝宗輔は家族が満州を離れ天津に引っ越したため，「満州国」の官費生をやめることとなり，華北政務委員会管轄の水利局の官費生になった。

1943 年 11 月に閻樹旻が帰国した数か月後，謝宗輔も春休みで帰国したが，戦争の情勢で日本に戻れなくなった。その後，謝宗輔は北京公務総署水利局に就職したものの，一年足らずの 1945 年 3 月には啓新セメント会社に転職した。同月，二人は北京で結婚した。閻樹旻は，鳳城中学校を退職し，結婚後，5 人の子供に恵まれ，10 年近く専業主婦となった。

謝宗輔は中華人民共和国成立後も同じ会社に勤めていたが，唐山市に転勤し，以降 30 年近く唐山啓新セメント工場の仕事に携わった。閻樹旻は 1954 年に謝宗輔の会社の付属唐山市啓新中学校で教員の仕事に復帰した。

1976 年 7 月に唐山大地震が発生した。唐山市ではこの地震によって 24 万人以上が亡くなり，住宅の全壊率は 9 割以上にのぼり，壊滅状態となった。謝宗輔一家の住宅も倒壊し，謝宗輔は足を骨折した。一緒にいた長男と二女は無事であった。閻樹旻は学校が休みに入り，瀋陽の実家に帰っていたため，難を逃れた。一時交通が不通となり，唐山に戻れたのは 19 日後であった。

1978 年に唐山市復興事業が本格的に始まると，謝宗輔は，唐山建設指揮部企画設計指揮部指揮に任命された。その後，唐山建設指揮部副総指揮，総工程師（正高級工程師）になり，10 年以上唐山復興の中枢部で働いた。

謝宗輔は長い間唐山市復興の第一線で指揮を執っていたため，唐山市の地震災害と復興の経験や教訓について，さまざまな国際シンポジウムで演説などを行った。1986 年 6 月に北京で開催された「唐山地震 10 周年国際学術討論会」で「唐山地震災害及び経験と教訓」を発表した。その翌年の 1987 年 4 月には日本建築学会の招聘で東京の「強震観測及び都市防災」の学術会議に参加し，「唐山地震災害及び復興」の講演を行っている。1993 年 11 月に「国際減災 10 年愛知なごや（名古屋）1993 国際防災会議」に出席し，「唐山地震災害及び復興建設」のタイトルで講演した。謝宗輔は退職後もずっと唐山市人民政府特邀（特別招聘）研究員であり続け，2011 年 3 月に 91 歳で亡くなった[21]。

閻樹旻は 2010 年に脳梗塞を患ったものの，今は，リハビリで回復しつつあり，息子と一緒に暮らしている。

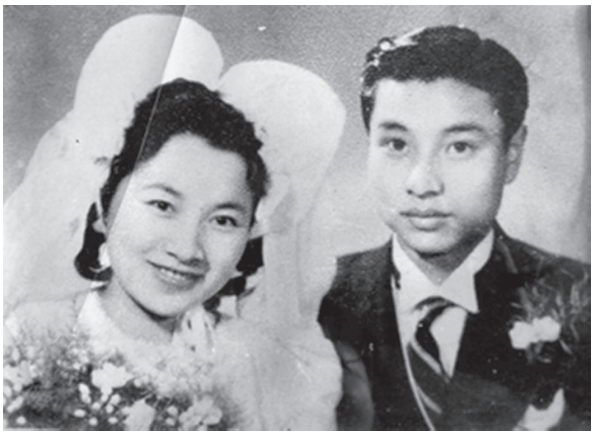

写真 2　閻樹旻と謝宗輔（1945 年 3 月）
閻樹旻提供

写真 3　閻樹旻と謝宗輔（2009 年 12 月）
周一川撮影

四．帰国後の行方

1994 年から元留学生予備校生は連絡を取り合って，同窓会が始まり，2002 年までに 計 8 回開催された。同窓会では毎回記念冊子が作成され，連絡用の名簿『留学生予備校同学録』（以下，『同学録』）も数回作られた。しかし，各期の在学者の氏名がすべて記載されているものではなく，連絡の取れた者だけが収録されている。それに加えて不定期に「留学生予備校同学会連絡センター」による『簡訊』も作られた。これらは，留学生予備校生の帰国後の行方を探る貴重な資料である。

一番データが多い 1999 年版の『同学録』には，216 名の留学先，最終学校，住所，電話などが収録されているが，中には予備校生ではなかった 6 名も含まれている。『同学録』には第 3 期生の 32 名のリストがあり，内訳は男性 16 名と女性 11 名（内 3 名は留学していない）である。

98 名の第 3 期卒業生のうち，予備校入学時の 1939 年から 60 年後の同窓会に参加できた者，あるいは連絡が取れた者は 32 名しかいなかった。女性は，卒業生 17 名中 11 名が同窓会に集まり，割合は高かった。

32 名の元の職場（一名は住所のみ）は以下のようなものである。

海軍司令部
北京 85 中学
57303 部隊
上海中医大学外語教研室
北京市税務局朝陽分局
ハルビン鉄路中心医院
西安市旅游外国語学院
社会福祉法人慈永会はまゆう療育園
台湾高雄市立医院小児科
瀋陽第 18 中学
河北省軽工業庁
遼寧省医薬工業研究院
唐山市建設指揮部
中学及冀東セメント集団会社

ハルビン化工総工場
南開大学国際経済研究所
秦皇島市第 2 医院
天津市国際貿易促進委員会
上海図書館科技情報研究所
天津市電材工業会社
天津市中央制薬第 2 工場
大連理工大学材料系
中国科学院
北京長安医院
ハルビン医科大学公共衛生系
北京市電車会社
内モンゴル医学院付属医院
第 4 軍医大学唐都医院
大連港務局職工医院
京都華僑総会
（住所：台湾台北）
大連市建築科学研究院

元の職場からわかるように，中国の華北地域と東北地方にいる者が多く，ほかには日本と台湾に在住している者が 2 人ずついた。

戦時下留学生についての研究調査を行う過程で，強く感じたことがある。つまり，数多くの留学生は，中華人民共和国成立後の自身の仕事などについては詳しく話してくれるのだが，その前の経歴についてはあまり話したがらないということである。そのため留学生たちの帰国直後の職場などについては，判明していないことが多い。第 3 期生についても同じ状況であるが，これまでの調査により判明した女子 7 名の帰国直後の職場は以下のとおりである。

表 4　留学した第 3 期女子学生（一部）帰国直後（1944 年）の職場

遼寧省鳳城中学校　教員
満州医大内科学教室
満鉄ハルビン医院内科
満鉄新京医院小児科
満州医大内科学教室
黒竜江省克山県国民女子国民高等学校　教員
北京公務総署

出典：①三崎裕子「東京女医学校・東京女子医学専門学校中国人留学生名簿」辛亥革命研究会『辛亥革命研究』8，1988 年 12 月，72 頁。
②2009 年 12 月 29 日，周一川による閻樹旻と謝宗輔へのインタビュー。
③2009 年 9 月 20 日，周一川による韓行懿へのインタビュー。

五．第 3 期生の特徴

1937 年 10 月，民生部は学校教育に関する諸法令（「学校令及学校規定」）を公布した。その諸法令に

よれば，教育改革の実施が制定されたのは1938年1月1日からである。「新学制」により中等教育の年限は6年から4年に短縮された。そのため，留学生予備校の第3期生から，「満州国」旧学制と新学制の生徒が混在し始めた。閻樹旻は中学校を3年で卒業して高校に入学したが，新学制になったので，安東女子国民高等学校で1年のみ勉強して卒業し，留学生予備校に入学した。韓行懿の場合は旧学制の生徒であり，中学校と高校をあわせて6年間学んだ。

留学生予備校第3期生の回想などによると，彼らは小学校で受けた三民主義の教育を鮮明に記憶している。3 期生は1939年初めに留学生予備校に入学したのであるが，1932年に「満州国」が成立する前の張学良時代に，小学校で三民主義の教育を受けたため，共和思想，抗日愛国の信念を持っている者は少なくなかったと考えられる。韓行懿は，小学校5年生まで一貫して愛国，三民主義の教育を受け，小学校の教師から習った共和思想，抗日救国の教えをしっかり覚えているという。「満州国」が成立した後，過去の教科書などを燃やして処分せよとの知らせがあったが，彼女は，処分しないことに決め，こっそり教科書を壺に入れて庭に埋めて隠した[22]。第 6 期生と第 7 期生の話によると，留学前には中華民国のことも知らず，日本に来てから先輩の留学生たちとの交流の中で初めて知ったという[23]。
不完全な統計であるが，第 3 期生の帰国後の所在地は東北より華北が多かった。1999年に作成された留学生予備校同窓会の『同学録』に掲載されている第1期・第2期生は5名のみであり，帰国後の留学生たちの所在地を分析するデータが不足しているが，第3期からは各期に数十名のリストがあり，どの地域に集中していたかの統計をとることができた。『同学録』のデータから，第 3 期生は以後の第 4 期から第8期までの所在地と異なり，東北地方ではなく，華北に集中していたことが明らかになった。これは，第3期生はそれ以降の学生に比べ，中華民国期に多くの教育を受け，その影響が強いがために，彼らが留学を終えたのちには「満州国」を離れようとしたことと関係していると考えられる。

おわりに

「満州国」留学生予備校第 3 期卒業生98名の内，84名が日本に留学した。留学しなかった女子学生3名の進学先は確認できたものの，男子学生11名の進路は不明である。

留学生予備校第3期卒業生の多くは，中華民国，「満州国」，日本で教育を受けた。留学先で専門学校や予科を修了してから進学した者も少なくなかったが，その後，戦乱を避けるため，学業を中断して帰国した者もいたし，学校の休みで一時帰国の際に，交通が不通となり日本の学校に戻れなくなった者もいた。留学中に親に呼び戻された者もおり，日本に残って命を落した者もいた。「満州国」の留学生たちは，戦乱に巻き込まれた時期が長く，戦争の被害者でもあった。

また，「満州国」留学生による「反満抗日」秘密組織があり，日本留学は，若者が「満州国」を脱出する一つのルートでもあった[24]ようだが，第3期生の中にこのような者がいたかどうかについては，今後の調査課題の一つである。

いろいろな留学経験を持つ彼らが帰国後に歩んだ道はまた多様であった。帰国した留学生の多くは「満州国」，中華民国，中華人民共和国の政権変遷を経て，さまざまな分野の職に就いたが，「満州国」と中華民国の時期は短く，ほとんどの者が新中国の建設と発展を支えることとなった。

［注］

(1) 阿部洋『「対支文化事業」の研究』汲古書院，2004年。
(2) 劉振生「「満州国」日本留学生の派遣」大里浩秋・孫安石『留学生派遣から見た近代日中関係史』御茶の水書房，2009年。
(3) 広田常次郎「留学生予備校と留学生」謝廷秀『満洲国学生日本留学拾周年史』1942年。

(4) まとめたものとして，周一川『中国人女性の日本留学史研究』国書刊行会，2000 年がある。
(5) 周一川「[満州国] の留学政策と留日学生――概況と事例研究――」アジア教育史学会『アジア教育史研究』第 8 号，1999 年。
(6) 周一川「「満洲国」における女性の日本留学――概況分析――」中国研究所『中国研究月報』，2010 年 9 月号；「奈良女子高等師範学校における「満州国」女子留学生」神奈川大学人文学研究所『人文学研究所報』No.45，2011 年 3 月。
(7) 第 4 期生の女子学生数は 1～6 期の女子合計数 71 名から他の各期の女子数を引くと 36 名となる。
(8) 謝廷秀『満洲国学生日本留学拾周年史』51 頁に 132 名を記してある。
(9) 同上，47～51 頁。
(10) 前掲，劉振生「「満州国」日本留学生の派遣」，171～172 頁。
(11) 元の資料にはタイトルがなく，本稿では周一川が便宜上タイトルを付した。
(12) 2009 年 9 月 20 日，周一川による韓行懿へのインタビューでは，留学生予備校に入学したときには文理系に分かれておらず，理系と文系に分れたのは卒業前ということである。
(13) 2009 年 12 月 29 日，周一川による閻樹旻と謝宗輔へのインタビュー。
(14) 劉振生『「満州国」日本留学史研究』吉林大学出版社，2004 年，152～153 頁。
(15) 駐日満州国大使館『満洲国留日学生録』1940 年度。
(16) 2009 年 12 月 29 日，周一川による閻樹旻と謝宗輔へのインタビュー。
(17) 前掲，『中国人女性の日本留学史研究』157 頁。
(18) 2009 年 12 月 29 日，周一川による閻樹旻と謝宗輔へのインタビュー。
(19) 同上。
(20) 三崎裕子「東京女医学校・東京女子医学専門学校中国人留学生名簿」辛亥革命研究会『辛亥革命研究』8，1988 年 12 月，72 頁。
(21) 2012 年 3 月 5 日，周一川による閻樹旻への電話インタビュー。
(22) 2009 年 9 月 20 日，周一川による韓行懿へのインタビュー。
(23) 2009 年 8 月 15 日，周一川による張連舜へのインタビュー；2010 年 9 月 9 日，王興栄へのインタビュー。
(24) 2010 年 9 月 9 日，周一川による王興栄へのインタビューでは，「反満抗日」に参加したい「満州国」の若者たちは，日本を経由して中国の内地に行く者がいた。王興栄のいとこもその中の一人であった。

[付記] 本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 C，「満州国」における女性の日本留学――1932～1945 年――）研究代表者周一川，課題番号 20510225）の助成を受けたものである。

Over the third-batch graduates of the preparatory school for oversea students of “Manchukuo”

ZHOU Yichuan・JIA Xi

It was the national policy of “Manchukuo” to send students to study in Japan. And the preparatory school founded in 1937 was an important agent to educate the applicants before they were sent abroad. Thus a large number of government-dispatched students were graduates there. To evaluate the oversea study during Manchurian period which existed for only dozens of years, it is very important to make clear of not only the aim and measures of sending-out policy of “Manchukuo” government, but also the background, destination, the actual situation of oversea students in Japan, and their career after returning as well.

Based on the historical documents and follow-up survey materials, the article tries to clarify the actual situation of the 3rd batch of the graduates who were relatively introduced in these documents, and the ralationship with Chinese society furthermore.